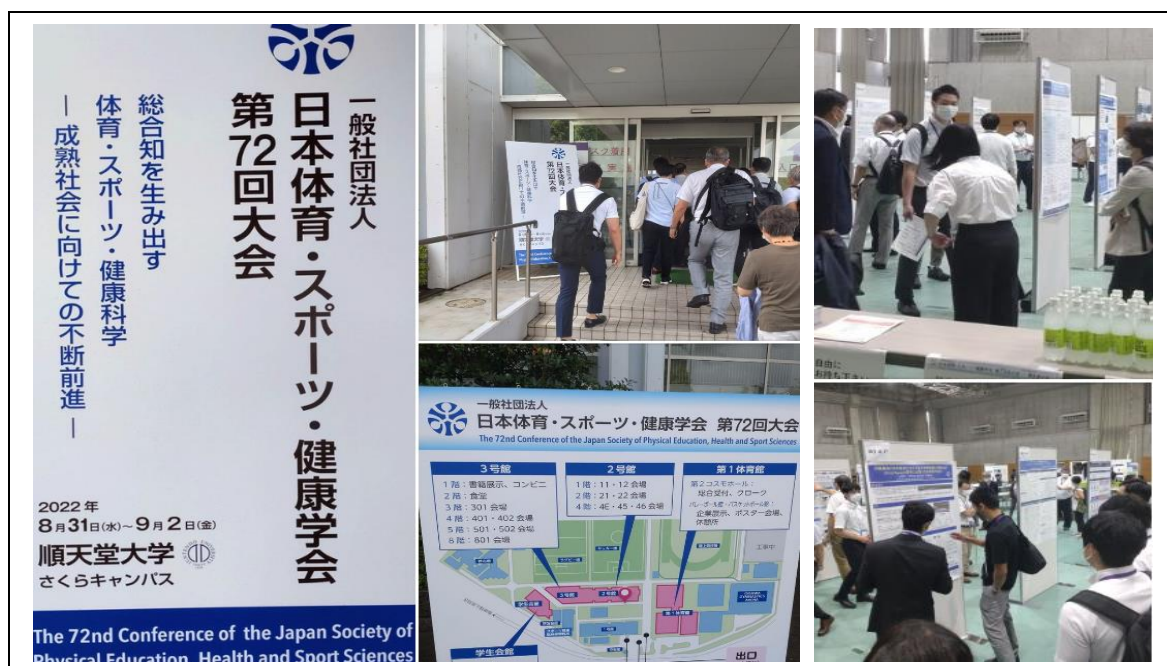


# News Letter

2022  
Winter issue

令和4年12月19日発行

*Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences  
Division of Sociology of Physical Education and Sport*



日本体育・スポーツ・健康学会 第72回大会

写真出所：日本体育・スポーツ・健康学会 Facebook <https://www.facebook.com/JSPEHSS/>

## 日本体育・スポーツ・健康学会 体育社会学専門領域

事務局：〒002-8502

札幌市北区あいの里五条三丁目 1-5

北海道教育大学 札幌校

石澤 伸弘 研究室内

E-mail:

ishizawa.nobuhiro@s.hokkyodai.ac.jp

## < 目 次 >

専門領域研究会傍聴記	1
キーノートレクチャー傍聴記	3
専門領域賞 受賞者の声	6
学生研究奨励賞 受賞者の声	7
研究委員会より	8
「年報 体育社会学」原稿募集	8
アーカイブ化 ご協力をお願い	9
事務局より	9

体育社会学専門領域研究会

「地域スポーツクラブは何を求められているのか：

第3期スポーツ基本計画と部活動の地域移行がもたらす変化」傍聴記

谷口 勇一（大分大学）

大変興味深いテーマ設定であった。企画運営された研究委員会に感謝したい。なぜならば筆者においては「部活動の地域移行」に関する「政策」自体に懐疑的であり、なおかつ批判の目をかなり強く向けている立場にあるからである。生徒および教員にとっておおいなる「学習活動の場であり機会」であった部活動が学校教育から外れることは何を意味するのか。生徒の学力向上は塾任せ、さらには、体力向上およびスポーツ文化の伝承は地域任せとなったとき、学校の存在意味はまさしく形骸化の途を歩まざるを得なくなるに違いない、との思いを強く抱いているからである。前置きが長くなった。シンポジウムを傍聴したまとめを記さねば。

まず、成城大学の海老島均氏のキーワードは「パスウェイ」という概念に収斂されていた。すなわち、学校スポーツ、地域スポーツ、トップ（エリート）スポーツのシームレスな連携可能性に力点が置かれていた。海老島氏の主要な研究フィールドであるイギリス（イングランド）、アイルランドのスポーツ事情とわが国の総合型地域スポーツクラブ（以下、「総合型クラブ」）活動とを比較したとき、見出すべき発想は「学校部活動と地域スポーツクラブの相互補完性構築」にあるという。イギリスにおいては2008年から「学校→コミュニティ→エリートへのシームレスなパスウェイ」を試行し「成功」に導いたとの報告がなされた。すなわち、イギリスにおいては、学校でのスポーツは友だちづくりが主目的、地域クラブは競技レベルに応じて多様なクラブが存在する、という相互補完性が存在しているわけである。結論としては、わが国における部活動の地域移行においては「多様性、個別性の尊重」「中体連・高体連のガバナンスの弾力化」「中高の部活動運営方針の改善」、さらには「競技団体、中高、地域クラブの3者の連携強化」が不可欠になろうとの主張がなされた。

「地域スポーツ創造実践行政職員」でいらっしゃる西政人氏（生駒市スポーツ振興課）からは「部活動の地域移行—いま総合型クラブが地域に求められる理由」と題して発言がなされた。2021年からはスポーツ庁の部活動の地域移行に関する検討会議委員もなされているとのこと。西氏からは「部活動の地域移行は教員の働き方改革が発端になった、いや、そういう声前面に出ることが多いが、最も大切にすべき発想は生徒のために、生徒が主役」であるという。特に中学校部活動を取りまく実情が旧来から「あたりはずれ」がある状況に終始してきたと認識している筆者としては、強く首肯する主張であった。なかでも部活動の地域移行を良好に実践するためには「ワンストップ支援体制の構築」、すなわち、「運動部」と「文化部」の一元管理が望ましいとされ、そのコーディネート、否、制度整備を市教委、中学校、スポーツ協会、そして総合型クラブが協働関係を以て構築しつつ進めていくべきなる強い主張がなされた。最も共感した点は「子ども（生徒）たちの活動が地域移行したと

しても『部活動』という名称は何とか残していきたい」であった。

松田雅彦氏（大阪教育大学附属高等学校平野校舎）とは個人的に約20年前からの知り合いの仲であり「さて、松田先生のつぎなるムーブメント展開はいかなるものなのか？」なる興味関心を抱きながらお話しをお聴きした。「スクール・コミュニティクラブ—ひらの倶楽部のチャレンジ」かあ、「部活動の地域移行を超えて」なる主意がまた殊更に興味深かった。「学習指導要領の記載内容に鑑みたとき、総合型クラブが部活動機能を抱え込むことは難しい、否、やるべきではない」とのこと。おー！なるほどであった。また、部活動の地域移行なる問題の主体が「学校」と「地域」の2つに跨る際、そこで最終的に見出すべき視座は「協働」でなくてはならないという。すなわち、現状の部活動の主体である学校もまた容易に主体逃れを志向すべきではないとの主張として理解させてもらった。これもまた首肯するところである。松田氏の取り組みは具体的かつ生産的である。「学校を卒業しても部活動は卒業しなくても良いしくみ」を創出しようとし、むしろ、「部活動のスポーツクラブ化」の実現をめざしつつ、実践されようとしている。うーむ、理想的である。但し、松田氏は附属高校の教員であり長年にわたり「そこに」いらっしゃるお立場。教員の異動が伴う公立諸学校の事情に鑑みたとき、一般化はどう図れるのだろうか。

失礼ながらも、ここまでの議論・発言に接し「なにやら、体育経営管理学専門領域のシンポジウムなのは？」と感じてしまうところであったが、コメンテーター兼発言者である伊藤恵造氏（秋田大学）が見事に体育社会学的議論に仕向けてくださった。伊藤氏からは「縮小化する地域社会と場を継承するスポーツクラブ」なる題目で発言がなされた。このたびの部活動の地域移行に向けた動きは、縮小化する社会（縮小社会）への対応に見出すべきであるという。縮小社会とはつまり、人口の減少しつつある社会、経済規模の縮小しつつある社会であると捉えられ、そのような社会における地域スポーツのあり方を論じようと言われた。但し「縮小」は「新たな開発」を誘導するとし、「独特の危機意識によって喚起された政策論としての志向性をはじめから強く」しながらも「未開発であるがゆえに潜在性をもつと見なされる『周辺』部においてこそ、重大で深刻な課題になっていく」（町村，2008）との解説がなされた。筆者なりの解釈としては、総合型クラブ育成において、クラブ育成が盛んに展開されている地域があったとき、その周辺地域においては「縮小社会」であるという事情とともに「隣の地域のような盛んな動きはもうできないよ…」といった「（クラブ育成をめぐる）意欲の減退・喪失」状況を惹起させることにも通じているのではなかろうかとも思うところであった。だとしたとき、部活動なるこれもまた「縮小社会」においても、仮に地域移行をはじめとした「成功」事例が生じ始めたとき、留意せねばならない点が見出せよう。すなわち、「成功」事例の周辺に存在する他の部活動および学校・地域においては、新たな制度・組織構築に係る意欲の減退・喪失を惹起させることが無きような配慮が肝要になってくるのであろうなと感じた次第である。伊藤氏からの「秘められた」主張点は「部活動の地域移行をはじめとした各種の政策は全国一律に通用する代物ではないのだ。むしろ『地方』においては各地域（自治体）事情と意思をいまこそ国に対してしっかり主張せねばならないはず」ということであったと感じている（伊藤さん、間違っていたらごめんなさい）。

以上4名からのご発言を受けて意見交換が行われた。がしかし、既に紙幅の余裕がなくなってしまった…。要約すれば？大変活発かつ生産的な議論が数多くなされた。なかでも、松田氏から発せられた「部活動の地域移行とかなんとか、いろいろあるけども、我々は面白がって制度変更に関ってみればよいはず！」なる内容は大変印象深かった。

最後にご挨拶をされた松尾哲矢研究委員長（立教大学）の談は、個人的に大変心に残るものであった。「部活動の地域移行なる新たな制度自体に接する中で自治体は大変混迷の度を深めつつある現状にあります。ときに私ども体育社会学という学問はこの新しい制度および動向に対する疑いの念、さらには批判的検討を忘れてはならないと思えてなりません」。体育社会学専門領域に所属する筆者においては、なにやら「安心した」御言葉であった。

（2022年8月30日開催）

## 2022年度 キーノートレクチャー

### キーノートレクチャー

#### 「体育社会学の専門性を俯瞰する」傍聴記

高峰 修（明治大学）

3年ぶりに対面で開催された第72回大会の体育社会学専門領域キーノートレクチャーには、海老原修先生が登壇された。海老原先生は35年間にわたって勤められた横浜国立大学を2021年3月末をもって退官され、同年4月からは尚美学園大学にて教鞭を執られている。先生は広島大学教育学部を卒業後、東京大学大学院にて故江橋慎四郎先生、ならびに宮下充正先生に師事し、運動生理学、バイオメカニクス等の自然科学系領域の宮下研究室にて実験、測定、データ収集および統計分析といった方法論の世界で、それらのエトスを吸収しつつも社会科学分野の研究を進めてこられた。特に1980年代を中心に隆盛したMcPhersonの「スポーツへの社会化」理論についてデータ分析に基づく実証的なアプローチによって多くの研究業績を残されている。

大学院時代にそうした環境で研究者としてのトレーニングを積んだこともあってか、海老原先生は“越境”を好んだように思う。いや、越境が境界線や枠を超えることだとすると、そうした境界線や枠というもの自体を無意味なものだと考えていらしたように感じている。私が海老原研究室に在籍している頃には、先生のバイオメカニクスや発育発達といった領域での発表練習を聞いた覚えがある。その内容は、例えば子どもの体力レベルという発育発達の課題を、兄弟の有無や家族との遊び時間、家族の運動経験、さらには居住空間の広さ（世帯収入と相関をもつ）という社会的要因との関わりから分析するといったアプローチであった。

さらに付け加えるなら、海老原先生は読者の皆さんもご存じの『体育の科学』誌の編集委員ならびに編集委員長を長く務められた。この雑誌は今や16の専門領域をもつ日本体育・スポーツ・健康学会の機関誌でもあり、毎回の特集テーマ、さらにその著者陣の専門分野の範囲は極めて幅広い。海老原先生の越境的志向性があったから

こそ果たせた役割であり、またその編集に長く関わられてきた経験は、分野を越境した知識の蓄積をより促した  
ことだろう。

前置きが長くなったが、海老原先生が今回のキーノートレクチャーのテーマ「体育社会学の専門性を俯瞰する」  
をどのように論じるのか、興味津々で当日を迎えた。さっそく、講演の概要についてまとめることにする。

当日の講演は「スポーツとは」「野球と民主主義～喜びの分割～」「一望監視装置 (Panopticon)」「運動会の仕  
掛け」の4つのセッションからなる。海老原先生はまず、Spencer H. (1875) "Education: Intellectual, Moral  
and Physical"を頼りに sport の語源を探り、本質的には何ら利用価値を持たない活動にエネルギーを費やす様を  
「放蕩」と表現しつつ、そこに sport のメタファーを見出している。さらにスポーツのもつそうした無価値性が  
教育によって色づけされ、文明化した近代社会を支える人材の育成に利用されることになった。

続いて「野球と民主化～喜びの分割～」と題して、1945年の敗戦直後に野球をめぐる活動が復活した事例が紹  
介されたが、それは野球を通じて民主化を進めるという GHQ の意向によるものでもあった。なぜ野球だったの  
か。野球では、各ポジションの役割が他のスポーツ競技のそれと比べて入れ替え不能なほどに異質で独立したも  
のと見做されたからである。さらに海老原先生はこうした野球におけるポジション役割の特殊性に、アダム・スミ  
スによる分業・分割の概念を見出している。アダム・スミスに倣えば、分業役割を与えられた「各自が自己利益の  
最大化を目指して行動すれば、おのずと市場全体が最適状態に到達する」(当日の発表スライドより)ことになる。  
他方でアダム・スミスは、人間の本質は労働にあり、労働は人間の喜びであるとも説く。こうした喜びの最大化は、  
製品の完成時に訪れる。このような人間と労働と喜びの関係に基づけば、労働分割の進展は喜びの分割、最小化  
を意味する。つまり「各自が自己利益の最大化を目指す」のか、あるいは例えば「バントをしる」という野球の  
指導者の命令に従うのかに、ジョン・デューイの説く自由の精神の発露とミシェル・フーコーの説く従順な身体  
の構築、両者の可能性を読み取るのである。

続いてベンサムによる一望監視装置を手がかりに、体育・スポーツにおける監視システムの作用を探る。徒競走  
を成立させる条件としてスタートからゴールまでの最短距離を走ること、複数のコースをアスリートが併走する  
ことがあり、ここに速さの優劣を明確かつ効率よく判定するという近代の合理性を見出す。さらにこうした場  
では、スタートの際のフライングを監視するスターターと監獄の看守 (inspector) が重なり合う。こうした徒競走  
という実践の繰り返しを通じて、規律化された従順な身体がつくりあげられると指摘する。

これに対して、運動会の徒競走でコースの最短距離を進むといった合理性にとらわれずに走る子どもたち、あ  
るいは「横に馬がいると、一緒に走るのが楽しいのか、いくら鞭を入れても伸びない」競走馬ディーブインパク  
トに、デューイの言うところの自由の精神を見出している。

しかしこの自由の精神が表出する子どもたちの徒競走も、運動会という場ではその巧妙な仕掛けに絡め取られ  
ていく。運動会では個々人のパフォーマンスが組や学年、紅白という帰属グループのそれへとすり替わるが、こ  
うした図式は容易に居住地域や市町村、都道府県、さらには国家間の競り合いへと拡張する。運動会では、例え  
ば徒競走や応援合戦を通じて、全てのメンバーが各帰属グループに親和を覚えるようになる。さらに帰属グルー

プへのこうした親和感が募れば募るほど、競争相手は敵対集団と化し、そこには排斥の論理が生じるのである。

以上、限られた字数の中で当日の講演概要をまとめた。予想はしていたが、海老原先生からは「体育社会学の専門性とは〇〇である」といったような説明はなかった。これまでもそうだったように、果たしてテーマと関係があるのかないのか考えさせられる話題を謎かけのように示し、そこからは聞いている側が先生の本意を探ることになる。

上述の講演内容を概観し直すと、まず「スポーツとは」のセッションにて、無価値なものに多大なエネルギーを注ぐことに sport のメタファーを見出していた。スポーツが無価値であるが故に、そこには例えば教育や労働、医療、あるいは経済や政治といった要素が染み込む。体育とは、スポーツに教育が接ぎ木されて育った枝である。本来的には無価値なスポーツに社会・歴史・文化的な意味づけがされることでスポーツを通じた人間形成(=体育)が行われる。戦後に GHQ が推奨した野球、運動会の徒競走といった体育的活動には、「自由」と「規律」という両義的な可能性が潜む。そして、一見すると体育の実践を通じて自由の精神が獲得されているように見えても、そのこと自体が規律化のシステムに巧妙に組み込まれているかもしれないのである。

このように見返すと、本講演の要点は、スポーツの生い立ちという内部に深く視線を向けながら、体育による人間形成の可能性の両義性を見定めると同時に、社会、つまり外部との接点を探りつつ、スポーツや体育と外部要因との関連や力学を読み解いているとまとめられるだろう。

筆者は今回のキーノートレクチャーから、体育社会学の専門性を以上の要点として受け取った。日本体育・スポーツ・健康学会を構成する専門領域の多くはスポーツや体育の内部に目を向けるが、本専門領域の研究テーマの多くは外部へ向かう批判的な視線ももつ。現代社会におけるスポーツや体育を取り巻く外部要因やそれらの関わりはさらに複雑化している。そのような複雑化する内外の諸要因の関係を、世相や流行、政策などに流されずに丁寧に、批判的に読み解いていくことが本領域の研究活動に求められているだろう。

(2022年9月1日実施)

「専門領域賞」を受賞して

中澤篤史（早稲田大学）

論文題目：

「中学校体育連盟の形成過程（1947-1967）：

運動部活動における教育と競技の関係性を再考する」

（体育学研究 第66巻 497-514頁（原著論文） 2021年）

私は、体育社会学に育ててもらった、と感じております。

学問の世界で人生を生きたい、とは10代の頃から漠然と考えていました。しかし、いったい何をするのか。振り返ってみると、大学へは理系で入学したものの途中で文系に移ったり、教育学の立場から身体を考えてみたり、雑食的に社会学を学びつつ歴史学にも傾倒したり、計量調査からフィールドワーク、資料分析へと方法も変化したりして、その時の気分やご縁に沿いながら研究を続けてきました。

そんな紆余曲折のキャリアで変わらなかったのは、体育学会の体育社会学の場で研究を発表し討議することを、学会活動の中心としてきたことです。

修士課程1年で、学部生時代の拙い卒論を発表すべく、埼玉大学へ赴いたのが私の体育学会デビューでした。2002年、ちょうど20年前です。学会とは何かを知る由もありませんでしたが、研究室の先輩方が毎年楽しそうに参加しているという雰囲気に乗せられてノリノリで参加してみました。すると、スリリングな発表体験、ドキドキする真剣討議、つながる研究者ネットワーク、仲間との打ち上げの達成感、と学会参加の面白さを味わい虜になりました。（ちなみに、体育学会メンバーのみなさまへの印象は「体がデカくて声もデカイ！」）

それ以来、計14回の個人研究を体育社会学領域で発表させていただきました。また、本部企画等のシンポジウムなどにも2回出させてもらいました。そうした折は、僭越ながら“体育社会学代表”気分で臨み、スベらないよう責任を感じておりました。（ちなみに、体育学会の醍醐味は学際性にあると感じていて、経験を重ねるごとに他領域での優れた研究者との出会いに恵まれ、そうした学会の楽しみ方／味わい方もできるようになりました）

思えば、今から10年前の2012年、拙論「なぜ教師は運動部活動へ積極的にかかわり続けるのか」で学会奨励賞をいただきました。『体育学研究』に投稿し体育社会学専門領域でメインに審査・受理されたもので、私にとっては、認められ評価された喜びに満ちた代表的業績の一つになっています。

ただ、この受賞には、「奨励」の文字通り、「なかなか頑張っている若手がいるな、今後もっと頑張れよ、まだまだ高みを目指しなさい」という叱咤激励のメッセージが含まれている、と解釈しました。そうして今回、研究方法は違えど同じく部活をテーマにした拙論で専門領域賞をいただき、合わせて学会賞も受賞することができ

ました。数えきれないほど受けた学恩のいくらかをお返しすることができたかも知れないと安堵しています。

(ちなみに今回の受賞論文、実は3回リジェクトされた後のアクセプトだったのでした)

最後に、私を育ててくれた体育社会学という学問およびそのコミュニティにいらっしゃるみなさま方に厚く感謝申し上げますとともに、引き続きご指導賜れますよう何卒よろしくお願い申し上げます。重ねて、この受賞を機に私自身喜びを噛み締めるだけでなく、これから多くの優れた後進を育て、さらに体育社会学を発展させるべく、微力ながら貢献できるよう努めたいと気持ちを新たにしております。

みなさま、本当にありがとうございました！

## 2022年度(第72回大会)学生研究奨励賞 受賞者の声

「学生研究奨励賞」受賞によせて

宮崎 亜美(立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 博士課程前期課程2年)

発表演題：

「キャリア形成をめぐる体育会文化に関する実証的研究—体育会所属学生を対象として—」

この度、日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会の体育社会学専門領域において、「学生研究奨励賞」を受賞しましたこと、大変光栄に存じます。審査をして頂きました審査委員会の先生方、日頃よりご指導を頂いております松尾哲矢先生に、この場をお借りしまして御礼申し上げます。

本研究は、大学で体育会運動部に所属し、競技に専心してきた学生が自身のキャリア形成にかかわる態度や意識を獲得する過程において、体育会に根付く固有の文化、すなわち「体育会文化」がどのような影響を及ぼしているのかを解き明かす試みです。具体的には、キャリアの概念に内包される「人と環境との相互作用の結果」、「時間的流れ」、「空間的広がり」、「個別性」という4つの不可欠な要素、それらの要素間の相互作用、体育会文化の構成要素に着目し、考察を行いました。

分析の結果、体育会所属学生は入部すると同時に多くのミッションが与えられ、そのミッションをクリアしていくことで体育会文化に触れ、そしてミッションではなくとも目上の人からの指摘や指示については従うのが当然であり、断ることや反論することはしないという態度や価値観が染みつき、上下関係が内面化していくと同時に、目上の人に対する礼儀作法も日常に溶け込んでいく様相が看取されました。体育会所属学生はこのような過程で培った目上の人に対する上下関係を踏まえた礼儀作法や我慢強さについて、社会に出るにあたって必要なことであり、キャリア形成における自己の強みであると捉えていることが示唆されました。また、体育会所属学生はミッションをこなしながらも、競技に専心すべきという価値観をもってうまく時間配分を行い競技に取り組み、



競技力向上のために自主性を発揮して練習に取り組む一方で、自分という存在は競技ありきで成り立っていると捉えている様相が看取され、競技に専心して取り組むほどに、自己の捉え方が競技空間に限定されがちになる可能性が示唆されました。

しかしながら、キャリア形成において体育会所属学生が強みとして捉えている上下関係を踏まえた礼儀作法については、上下関係が内面化していくという過程を経て獲得していることから、実は非常に他律的な側面を内在化させている可能性があるかと推察されました。

このように体育会所属学生がキャリア形成にかかわる態度や意識を獲得する過程において、体育会運動部活動を中心とした「人と環境の相互作用の結果」、「時間的流れ」、「空間的広がり」のなかで、学生自身は上下関係を踏まえた礼儀作法の獲得が強みだと思っている一方で、他律性をも引き受けてしまう構図があり、キャリア形成において主体的な取り組みのなかに他律性が意図せざる結果として入り込む可能性が示唆されました。また、「個別性」においては、体育会文化が体育会所属学生共通の文化として共有されることで、いわば各個人の独自性という意味における「個別性」は脆弱なままにとどまる傾向が示唆されました。

今回の受賞は、今後の研究への期待値を込めてのものであると受け止め、より一層真摯に研究活動に励む所存で御座います。引き続き皆様からのご指導のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

## 研究委員会より

### ■専門領域研究セミナーの開催

- 研究および会員サービスの充実に資するため、体育社会学専門領域研究セミナーを実施します。  
詳細は後日メールにてお知らせします。

1. 名称：2022年度第1回体育社会学専門領域研究セミナー研究
2. 期日：2023年2月21日（火）18：00～19：30

（※研究セミナー前後に評議会と臨時総会の開催を予定していますが、詳細は後日改めてお知らせします。）

## 「年報 体育社会学 第4号(2023)」の原稿募集について

## —「年報体育社会学」編集委員会—

「年報体育社会学」編集委員会では、現在第4号（2023年3月末刊行）の投稿論文の原稿を受け付けております。投稿された論文が2023（令和5）年1月末までに論文審査を終えて採択されれば第4号への掲載となりますが、1月末を過ぎても採択後には翌年の機関誌の刊行（第5号）を待たずにJ-stageへ早期公開し、可能な限り投稿者の研究成果を国内外の研究者に広く共有してもらえよう編集体制を整えております。投稿先を検討中という会員の皆様には、是非とも「年報体育社会学」へのご投稿を検討ください。なお、投稿には締め切りはございません。年間を通じて投稿を受け付けておりますので、何卒よろしく願いいたします。詳細は、「投稿に関わる諸規程等一覧」をご覧ください。

[http://pesociology.jp/wp/wp-content/uploads/annualreport\\_regulations\\_20181008.pdf](http://pesociology.jp/wp/wp-content/uploads/annualreport_regulations_20181008.pdf)

「年報体育社会学」J-STAGE はこちらからご覧いただけます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/arspes/-char/ja>

## アーカイブ化 ご協力をお願い

## —広報委員会—

現在、日本体育・スポーツ・健康学会体育社会学専門領域の発表論文集・抄録集をアーカイブ化しています。第15号～現在までの論文集・抄録集については体育社会学専門領域ホームページ上で公開いたしました。第14号までのアーカイブ化については事務局で保管している現物がないことから作業を中断しております。もし、アーカイブ化にご協力いただける方がおられましたら、下記アドレスにご連絡いただけないでしょうか。

事務局メールアドレス：[taishajimukyoku@gmail.com](mailto:taishajimukyoku@gmail.com)（事務局専用）

なお PDF にするにあたり、背表紙を約1cm程度切り落とす必要がありますので、その点をご了承いただける方がおられれば幸いです。何卒ご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

## 事務局より

1. 会員動向：体育社会学専門領域の会員数は、2022年11月29日現在352名です。
2. 会員情報変更：日本体育・スポーツ・健康学会会員の名簿管理は学会本部が行っております。勤務先の住所・所属などの変更があった場合は、すみやかに学会ホームページよりマイページにログインして変更するか、もしくはホームページ上にアップロードされている「会員情報変更届」を学会本部事務局に FAX、封書、メールにて送付してください。学会本部とともに専門領域事務局にもメールでご連絡いただけると助かります。
3. 会則および諸規定等の改訂版について：諸規定等の改訂版は、随時専門領域ホームページに掲載していますので、ご確認ください。

事務局メールアドレス：[taishajimukyoku@gmail.com](mailto:taishajimukyoku@gmail.com)（事務局専用）

## あとがき

News Letter 2022 Winter Issue をお届けいたします。

過日、順天堂大学にて日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会が3年ぶりに対面形式で開催されました。多くの方が現地参加されたことと思いますが、いかがでしたでしょうか。個人的には、各種の研究報告とそこでのディスカッションの内容を、場の雰囲気を含めて直接的な体験として学べることの幸せを改めて感じました。

今号では、同学会大会に関連するトピックについて、会員の方々の生の声を中心にお伝えしています。お二人の会員による「専門領域研究会」と「キーノートレクチャー」の傍聴記につきましては、「年報 体育社会学 第4号」に掲載される「専門領域研究会」と「キーノートレクチャー」の詳細な報告内容と併せてお読みいただければと思います。また、「専門領域賞」と「学生研究奨励賞」を受賞されたお二人の言葉からは、受賞対象となった研究成果への思いとともに、体育社会学研究に真摯に取り組む姿勢の大切さを感じることもとなりました。お忙しい中で原稿をお寄せくださった会員のみなさまに厚く御礼申し上げます。

さて、惜しくもベスト8には届きませんでした。日本中がサッカーワールドカップでの代表チームの快進撃に沸き立つこととなりました。冬の、ヨーロッパのサッカーシーズンの真ただ中の、中東カタールでの開催、VARの導入、交代選手枠の拡大といった初めて尽くしのワールドカップでは、各国間の実力差の縮小とも相まって、ドラマチックな試合展開が目につきました。まさに日本代表チームの躍進やワールドカップの熱気が、様々な問題を抱え閉塞感が漂う日本社会に明るさをもたらしてくれたように思います。こうした明るさはほんの一時のものに過ぎないのかもしれませんが、日本はもちろんのこと、世界中の人々が希望をもって新しい年を迎えられることを願ってやみません。

巷では新型コロナウイルス第8波とインフルエンザの同時流行が懸念されております。各会員のみなさまにおかれましては、くれぐれもお身体ご自愛ください。どうか良いお年をお迎えください。

藤井雅人（広報委員会）